



星の詩 月の歌

斐田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は榜ぎ出でな
にぎたつ ふなの
 波津海の豊旗雲に入日さし今夜の月夜清く明りこそ
わたつみ こよひ つくよきよ あか
 月讀の光に來ませあしびきの山を隔りて遠からなくに
つくよみ へな
 春されば木がくれ多き夕月夜おぼつかなくも山陰にして
ゆふづくよ かげ
 ぬべたまの夜渡る月をおもしろみ吾が居る袖に露ぞ置きにける
 水底の玉さへ清に見つべくも照る月夜かも夜の深けゆけば
 雨晴れて清く照りたるこの月夜また更にして雲な棚引き
さや つくよ
 さ夜中と夜は深けぬらし鴈が音の聞ゆる空に月渡る見ゆ
つゆくよ
 秋風の清きゆふべに天漢舟榜ぎ渡る月人壯子
あまのがは こ つきひこをさこ

(萬葉集)

五月雨は心あらなむ雲間より出で來る月をまてば苦しも
 天の川みなわさかまきゆく水の早くも秋の立ちにけるかな
 秋風に夜のふけ行けばひさかたの天の河原に月かたぶきぬ
 天の原ふりさけ見れば月清み秋の夜いたくふけにけるかな
 紅のちしほのまふり山の端に日の入るときの空にぞありける

(金槐和歌集)

たらちねの母がなりたる母星の子を思ふ光我を照せり
 寝しづまる里のともしび皆消えて天の川しろし竹藪の上に

(正岡子規)

迢迢牽中星 皎皎河漢女 織織擢素手 札札弄機杼 終日不成章
オササシ ノ ヌキ ス ヲ ル
 泣涕零如雨 河漢清且淺 相去復幾許 盈盈一水間 脈脈不得語
オササシ ノ クシ ル ソ ノ ル

(西漢、古詩)

夜宿山寺 唐李白

層樓高百尺 手可摘星辰 不敢高聲語 恐驚天上人
サ ツカラ ツマム ヲ テ ニ ラ クハ カサン ノ ヲ

京都 池田政晴集む